

実践報告 英語と日常的に触れるために

キーワード: 英語の日常化、授業外活動、協同学習

堀内 ちとせ

1. はじめに

英語に対して学習意欲の見られない医療系の学生たちの日常に、自然な形で英語を浸透させるために、2012年度より、「英語活動・実体験レポート」の試みを始めた。

授業内の取り組みとしては、積極的な「授業参加」を図るために、2008年度より「グループ活動」を採り入れてきた。TOEIC や TOEFL の受験なども叫ばれている昨今、授業への学生参加を呼びかけることのみならず、授業外でも英語に無理なく触れていけるような形へと導いてやることは、意味あることではないだろうか。

医療系大学 2012 年度、前期の臨床検査系クラス 54 名の取り組みと、2013 年度、前期のリハビリテーション系クラス 56 名について、学生たちへのアンケート調査をもとに検討する。

2. 授業外の「英語活動」

2.0 「自主課題」から「英語活動」へ

担当学生は、専門が医療系ということもあり、中には、英語が余り得意でなく試験だけでは 60%以上を獲得できないような学生も存在している。そんな学生たちのために、長い間、「自主課題」なるものと呼びかけ、評価点の保険的措置を行ってきた。

過去 20 年近くも行って来た「自主課題」は、特に定まった形式はなく、文字通り、学生の「自主性」に任せたものであった。内容的には、学生が自主的に教科書の予習(単語調べや本文の日本語訳がほとんど)をしてくるものが、ほとんどであった。数年前から、教科書の内容にこだわらず、自分の好きな本や歌などの日本語訳などの自由的要素も盛り込むことを呼びかけ始めた。

「自主課題」は、従来、週末など学生たちの時間が取れた折などに、まとめて行うようなものが多かった。ところが、「継続は力なり」ということわざにもあるように、2012 年より、「週末にまとめて」といった形ではなく、少しでも、「毎日、継続して」英語に触れていけるよう、呼びかけることとした。

最初は、評価の足りない部分を補うものとして出発した「自主課題」だったが、「英語活動」と形を変えてからは、大学での授業が終わってしまった後のことも考慮するものとなった。中学から6年以上も勉強してきた英語と、授業がなくなるのと同時に、付き合いがなくなってしまうのは余りにも寂しい。英語の授業が存在しているうちに、英語と自然な形で触れ合う「習慣付け」をしてやることには、

大切なことではないだろうか。日常的に英語と無理なく触れるようになることで、英語と「一生の友達」になれる可能性も生まれてくる。

2.1 「英語活動・実体験レポート」

2.1.1 「英語活動」について

「英語」にまつわる活動なら、何でも「英語活動」と位置付けた(資料1 参照)。目にした英語の意味を考えたり、耳にした英語の内容を考えることはもちろん、「英語にまつわるトピックについて誰かと話す」というのも「英語活動」と呼ぶ。例えば、「TOEIC 受験について誰かと語り合う」といった活動も、「英語活動」である。「英語活動」を取り組みやすいものとするのは、特に、英語嫌いの学生の「英語活動」へのハードルを少しでも下げてやるためでもある。

「英語活動」の内容の幅を極力広くしたのは、英語が比較的良くできる学生を考慮してのこともある。例えば、授業の内容だけでは飽き足りない学生などには、TOEIC 受験を目指して TOEIC に向けての勉強を自分のペースで進めていくよう呼びかけることなどが、それである。また、医療系の論文を自分なりに読み進めていくことも可能である。「英語活動」は、意欲のある学生に対しては、授業ではカバーしきれない部分を補ってくれる要素も持ち合わせている。

2012 年度以前の「自主課題」と大きく異なるのは、できるだけ「毎日継続」して実行するという点である。「週に一回必ず実行」というのも、長い目で見れば、「継続」ではあるが、2012 年度からは、できるだけ「毎日」活動できるよう呼びかけた。

ただ、「毎日継続」というのは、英語が嫌いでもなく、かなり大変なことである。そのため、活動時間は、どんなに短時間でも良いこととした。また、毎日、「前向き」な一言感想を入れることで、心理的側面からも「英語活動」の継続をバックアップさせようとした。

「自主課題」と同様に、「英語活動」もテストの素点が十分でなかった場合の保険的措置として機能する。ただ、テストのみで十分評価点が足りている場合でも、「努力点」として評価点の一部として加味させた。この点も、「自主課題」の場合と同じである。

2.1.2 「実体験レポート」について

毎日の「英語活動」を記録させ、「実体験レポート」して提出させた。「実体験レポート」には、「実施日」、「実施内容」、および、前向きな「一言感想」を明記させた(資料1 参照)。実施内容は、極力、簡潔に記述させた。記録が面倒になり、活動を続けるのが困難になる可能性を回避するためである。

正規の授業では、「実体験レポート」をグループで交換し合っ、お互いの実体験内容の良い点を褒め合い、次回に向けて激励し合うといった活動の場を設けた。「英語活動」を毎日続けられるよ

う、仲間の力によっても、バックアップさせた。

2.2 「取り組み」について

2012年度は、毎日、「英語活動」を行うよう学生に声をかけ始めた最初の年である。内容は、英語にまつわることであれば、何でも良いこととし、とにかく、毎日、続けられるよう呼びかけた。また、授業がある度に「実体験レポート」を持参させ、授業内のグループ活動を盛り上げる効果も期待して、毎時間、グループ内で「実体験レポート」を交換し、お互いの頑張りを褒め合うことから授業を始めた。

「英語活動・実体験レポート」開始から2年目の2013年度からは、「英語活動」をする際、自分なりの「目標」を定めて実行させることとした。「継続させる」ことだけでも、かなり意味があることではあるのだが、「目標設定」させることで、実際に「何かを達成する」という事にも目を向けさせてみることにした。

また、2012年度の、「平日も、週末も英語活動」といった形を改め、週末や休日などは休んでも良いこととし、英語に抵抗がある学生の負担を減らした。ひたすら継続させるということよりも、「目標設定」をさせることで、もっと実質的な面に目をむけさせようとした。

授業内に仲間同士で褒め合い、激励し合う活動については、2013年度より、授業内に褒め合う時間が毎回取れないこともあり、隔週、さらに、時間がとれない場合は、3週間程、間隔が空いてしまうこともあった。実体験レポートは、基本的に、毎時間、持参するように伝えていたが、中には、褒め合い活動をする日にレポートを忘れていた学生が多いクラスもあり、毎週のように確認する場合もあった。

2012年度は、レポートをグループのメンバーの1人が責任を持って確認しコメントも入れ、グループのメンバーに向かって良い点を口頭で伝える形を取った。一方、2013年は、グループのメンバー1人に確認を任すのではなく、全員でレポートを鑑賞し合い、コメントし合う形を取った。2013年は紙面上のコメントの形のみで褒め合う形となった。

3. 結果と考察

3.0 「アンケート」について

最後の授業時に、対象学生全員にアンケート調査を行った。アンケートの尺度は、「1・2・3・4・5」の5段階とし、「1」は「全くそう思わない」、「5」は「とてもそう思う」とした(『活動性を高める授業づくり』(2012)P.125 参照)。また、可能な場合にはコメント等も記述させた。

2012年度と2013年度との違いは、2013年度からは、「週末は休んでも良い」という自由を与え、「英語活動」をするに当たり「目標」を設定させ、実質できるようになる事にも目を向けさせるようにしたという点である。その方法の違いが、どのような結果を生み出すのだろうか。

「英語活動」についての、具体的なアンケート項目のうち、2012年度と2013年度の共通のものは、以下の通りである。

- ①楽しんで取り組めた。
- ②授業が終わっても、続けていけそうだ。
- ③一生、続けていけそうだ。

2013年度の結果では、3項目とも、できたら向上していることを期待したい。3項目ともは難しかったとしても、何とか①の項目だけでも良い変化を期待したいところである。「楽しんで」取り組めていれば、今後も続けていける可能性も十分期待できる。

また、2013年度より、「英語活動」を行う際に「目標」を設定させた関係で、2013年度は以下の2項目も追加した。

- ④自分の決めた「目標を意識」して取り組めた。
- ⑤「英語活動」により、できるようになってきた事がある。
- ⑥英語をもっと勉強したくなった。

⑤の項目に関しては、2012年度も、できたら聞いてみたかった項目である。残念ながら2012年度のデータはないが、2013年度に、「目標」を定めることによって、何か「できるようになってきた事」があると答える学生の割合を確認することで、次の取り組みに続けていきたい。そこで、⑥の項目も追加した。

⑥の項目に対して「5」、「とてもそう思う」、「そう思う」と回答する学生の数を増やすことができれば、社会に出てから、TOEICを受ける必要性が出てきた場合(医療系大学の場合、一般的な大学ほどのTOEIC受験の必要性が迫られていない)も自然な形で入っていけるだろう。

生涯をかけて何かを学んでいける機会を自らの意思で持ち続けられることは、素晴らしいことと言えるのではないだろうか。

3.1 アンケート項目①について

図1

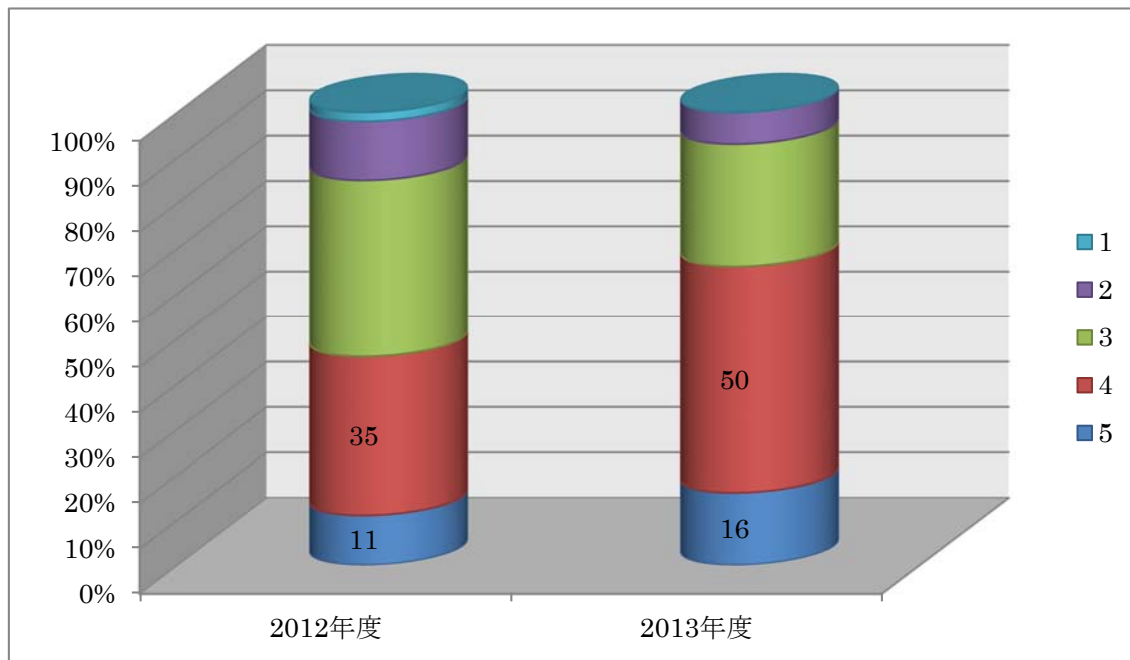


図1は、アンケート項目①、つまり、「英語活動」を「楽しんで取り組めた」という項目に対するアンケート結果を1つのグラフにまとめたものである。「5」、「4」、つまり、「とてもそう思う」、「そう思う」と回答している学生の割合を比べてみると、2012年度は半数近く(11%+35%=46%)であるのに対して、2013年度では、過半数を超えている(16%+50%=66%)。

表1

	2012年度前期 (n=54)		2013年度前期 (n=56)		t (108)
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
アンケート項目①	3.45	0.91	3.78	0.81	-2.06 *

注:* $p < .05$

表1はアンケート項目①、「楽しんで取り組めたか」について、2012年度と2013年度の間における平均値の差を、有意水準5%で両側検定のt検定により検討した結果をまとめたものである。その結果、アンケート項目①について、これらの平均値の差は有意であった。

2012年度と、2013年度の取り組みの違いで大きなものと言えば、やはり、「休んでも良い日」を設けたことである。「継続する」ことは大切ではあるが、一方で、しっかり「休むこと」も大切だと言えるのかもしれない。

また、学生自身が自分で楽しんで続けられる内容のものを選んで取り組みさえすれば、「休日なし」の取り組みであったとしても、ほぼ半数(11%+35%=46%)の学生たちが「楽しんで取り組めた」

と答えているという事実にも目を向けたい。

3.2 アンケート項目②について

図2

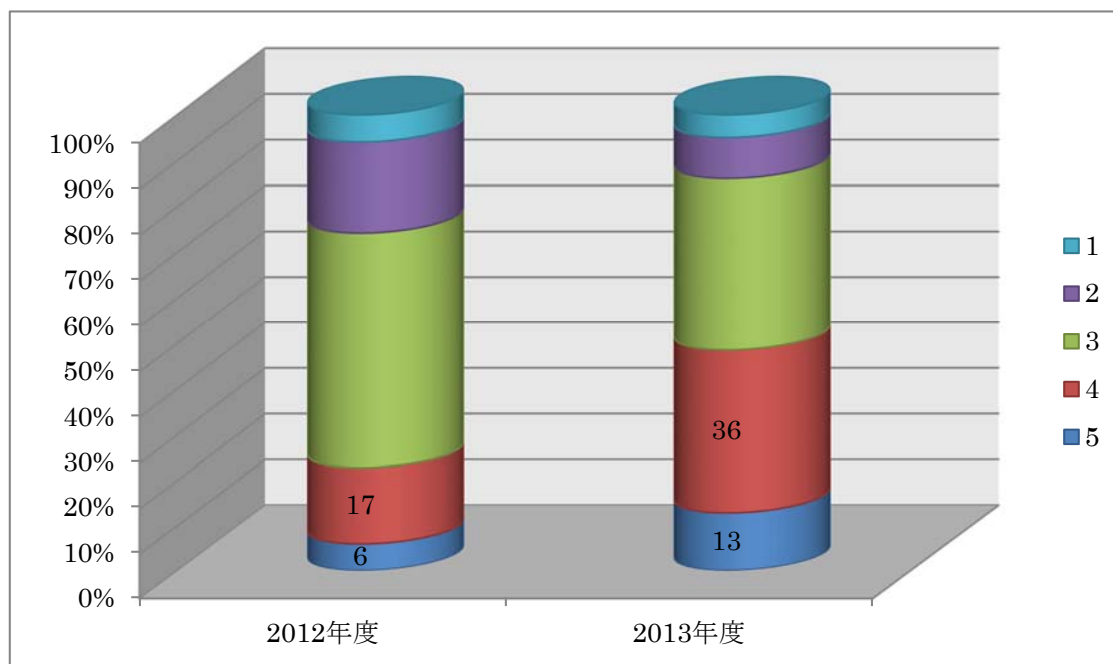


図2は、アンケート項目②、「英語活動」を「授業が終わっても、続けていける」という項目に対するアンケート結果を1つのグラフにまとめたものである。「5」、「4」、「とてもそう思う」、「そう思う」と回答している学生の割合を比べてみると、2012年度は20%を少し上回ったほど(6%+17%=23%)であるのに対して、2013年度では、半数近くに上っている(36%+13%=49%)。

アンケート項目②のグラフ(図1)を、アンケート項目①のグラフ(図2)と比べてみると、「5」、「4」と回答している学生の割合は、全体的に低めである。「楽しい」という要素は、即、「授業が終わっても、続けていける」ということには、つながらないのかもしれない。

表2

	2012年度前期 (n=54)		2013年度前期 (n=56)		t (108)
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
アンケート項目②	3.00	0.90	3.45	1.00	-2.57 *

注:* $p < .05$

表2はアンケート項目②、「授業が終わっても、続けていける」という項目に対して、2012年度と2013年度の間における平均値の差を、有意水準5%で両側検定のt検定により検討した結果をまと

めたものである。その結果、アンケート項目②について、これらの平均値の差は有意であった。

このことより、授業後も「英語活動」を続けていけるということには、「楽しい」という要因に加え、やはり「休日」があるという要因が、大きい意味を持っているとことが分かる。

3.3 アンケート項目③について

図3

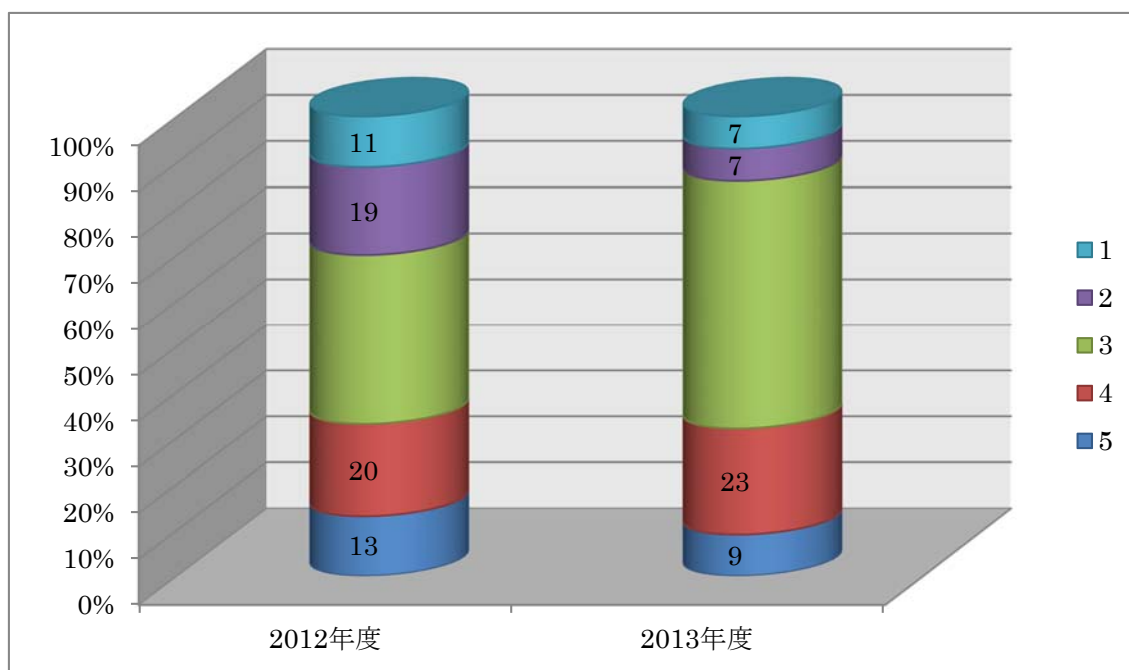


図3は、アンケート項目③、つまり、「英語活動」を「一生、続けていけそうだ」という項目に対するアンケート結果を1つのグラフにまとめたものである。「5」、「4」、つまり、「とてもそう思う」、「そう思う」と回答している学生の割合を比べてみると、2012年度も2013年度もそれほど違いが見られない(13%+20%=33%/9%+23%=32%)。

逆に、「1」、「2」、つまり、「全く思わない」、「思わない」と回答している学生の割合を比べてみると、2013年度(7%+7%=14%)は、2012年度(11%+19%=30%)の半分程の割合に減っている。

表3

	2012年度前期 (n=54)		2013年度前期 (n=56)		t (108)
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
アンケート項目③	3.09	1.16	3.23	0.95	-0.71

注:* $p < .05$

表3はアンケート項目③、「英語活動」を「一生、続けていけそうだ」という項目に対して、2012年度と2013年度の間における平均値の差を、有意水準5%で両側検定の t 検定により検討した結果をまとめたものである。その結果、アンケート項目③について、これらの平均値の差は有意ではなかった。

「先のことは良く分からない」、といった事だただけである可能性もある一方で、「休日」を設けたとしても、「楽しんで」行ったとしても、「一生続けていく」とことは、なかなか大変なことだということ、ここからも言えるのではないか。

3.4 アンケート項目④について

図4

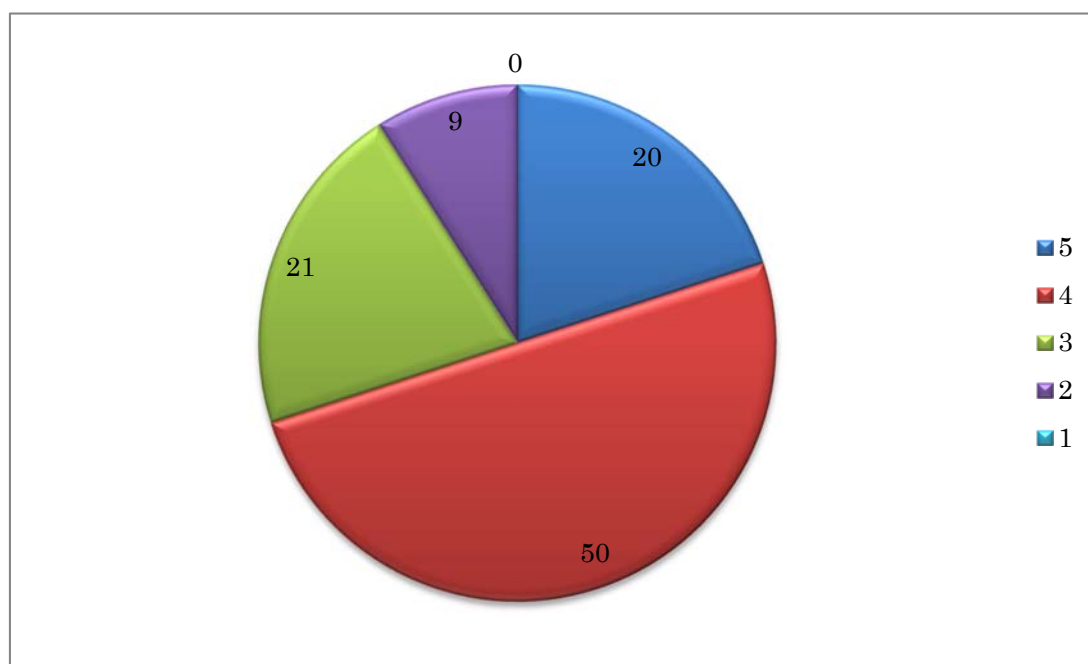


図4は、2013年度の初めての取り組みとして行った、「英語活動」を行う際に「目標を設定させる」という試みに対して、「自分の決めた『目標を意識』して取り組めた」というアンケート項目④に対してのアンケート結果をグラフにまとめたものである。「5」、「4」、つまり、「とてもそう思う」、「そう思う」と回答している学生の割合を見てみると、大きく過半数を超えている(20%+50%=70%)。

「英語活動」に「目標設定」を行わせた初めての年だったこともあり、「英語活動」の記録である「実体験レポート」における指導も徹底させただけのことがあったと言えるかもしれない。貴重な時間を割いて「英語活動」をさせるなら、その時間を少しでも有効に使いたいものである。そのためにも、今度とも「目標設定」を、是非呼びかけていきたい。

3.5 アンケート項目⑤について

図5

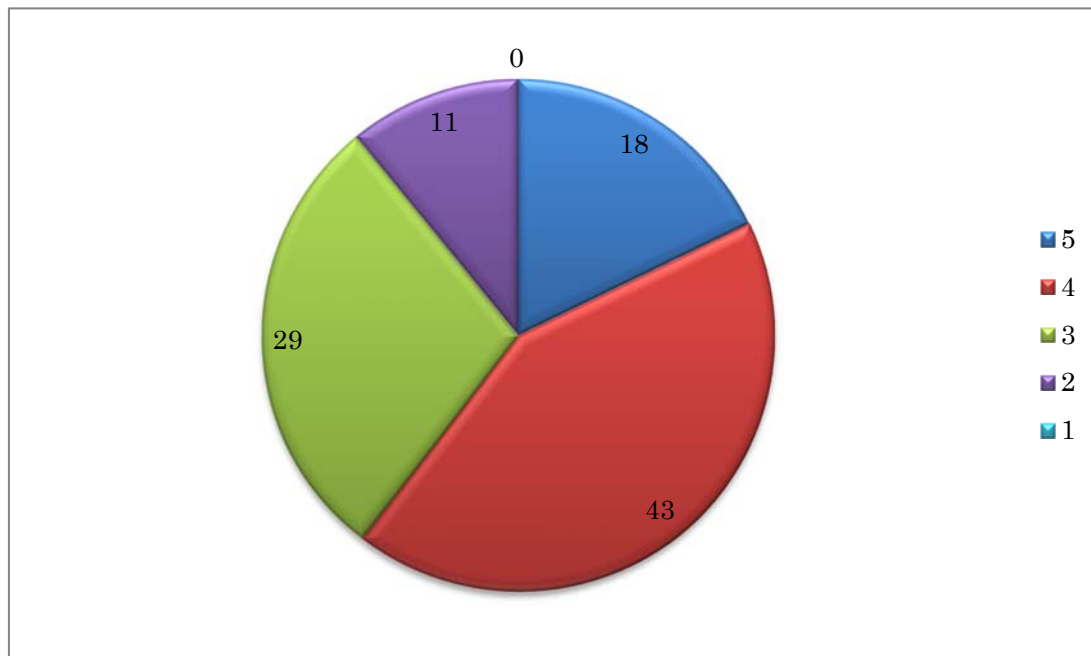


図5は、『英語活動』により、できるようになってきた事があるというアンケート項目⑤に対するアンケート結果をグラフにまとめたものである。「5」、「4」、つまり、「とてもそう思う」、「そう思う」と回答している学生の割合を見てみると、アンケート項目④に近い形で過半数を超えている(18%+43%=61%)。

アンケート結果④と⑤より言えるのは、何かをする場合は「目標」を持って行うことが大切だと、いうことではないか。貴重な時間を割いての「英語活動」であるのなら、なおさら、活動することによってできるようになる事があってほしいものである。何かができるようになれば、嬉しいし、そのことが、英語活動を続けていこうという気持ちにもつながっていくだろう。「もっと高い目標を立てて頑張ってみよう」という気持ちの向上にさえ、つながっていく可能性もあるのではないか。

3.6 アンケート項目⑥について

図6

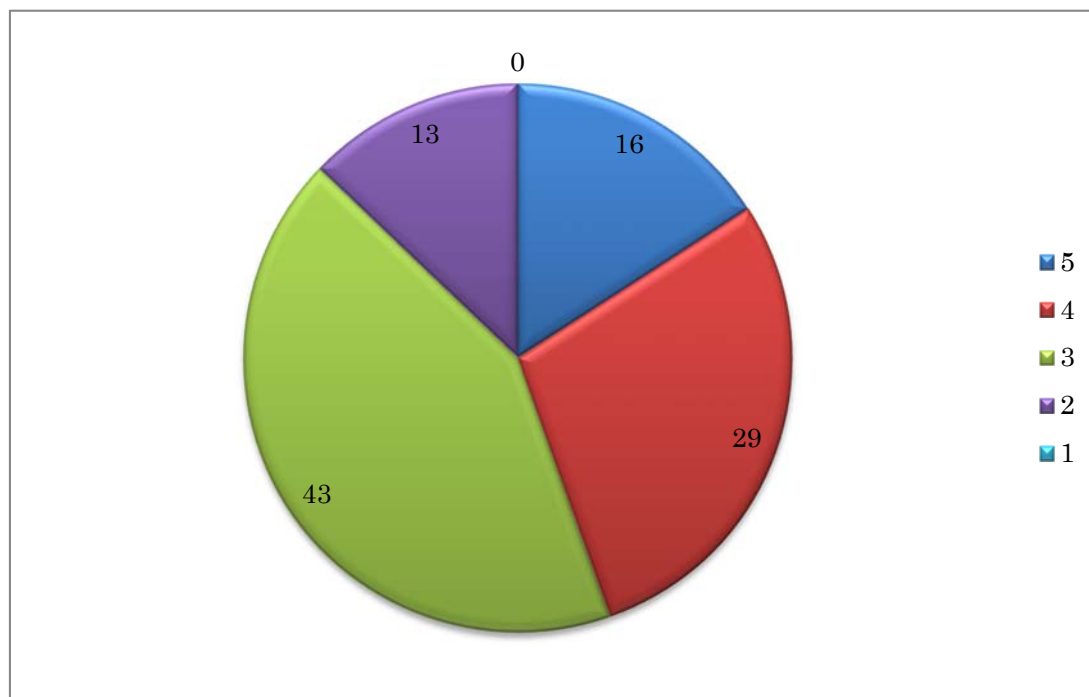


図6は、「英語をもっと勉強したくなった」というアンケート項目⑥に対するアンケート結果をグラフにまとめたものである。「5」、「4」、つまり、「とてもそう思う」、「そう思う」と回答している学生の割合を見ると、僅かながら半数を切っている(16%+29%=45%)。

この結果は、一概に「英語活動」を行わせたことだけによる結果とは言えない部分もある。毎週の英語の授業の影響もあるだろうし、他教科の課題などの変なことも影響している可能性もある。ただ、「勉強したくなった」という気持ちにさせるためには、英語と十分付き合わせてやることも大切なことではないか。付き合うことにより、英語の良さに気付くことも多くなると考えられるからだ。「英語活動」は、自分の気の向く内容で行わせているので、長く付き合えば付き合うほど、「前向きな気持ち」が生まれてくる可能性も大きいのではないだろうか。

4. おわりに

2008年度より、授業の中にグループ学習を採り入れ始め、2009年度からは、協同学習の考え方も採り入れながら、学生たち授業参加を目指している。授業での取り組みを何かの折りに、お話しさせていただく度に、学生たちの英語能力の向上についての質問を受けるのが常である。もちろん、せっかく英語をやるのなら、能力の向上があった方が良いことは分かる。ただ、最近、勤務校の学生の中に、ある程度の英語能力はあるにもかかわらず、英語が余り好きではないという学生が、かなり存在していることに気づいた。英語能力を高める以前に、英語をもっと好きになってもらうことの方が先決だと感じた。

そんな中で、始まったのが、「英語活動」である。「英語活動」は、授業の予習、復習の枠を超え、学生たち自らが、人から与えられた内容ではなく、自分で決めた(自分の気の向く)内容のものを継続して実行していくものである。この活動がうまく機能すれば、大学での授業が終わった後でも、無理なく英語に触れていくことが可能となり、行く末は、英語嫌いだっただ学生が英語と一生付き合っていくことでさえ夢でなくなるかもしれない。

学生が無理なく参加できるような授業を目指していくのと同時に、学生が英語と「人生の友達」になれる可能性を秘めた「英語活動」の方も、これからも、しっかりと呼びかけていきたい。

参考文献

- 協同学習法ワークショップ〈Basic〉2009年改訂版 日本協同教育学会。
 協同学習法ワークショップ〈Advance〉ver.2.0 日本協同教育学会。
 杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ(2004)『大学授業を活性化する方法』玉川大学出版部。
 安永悟(2012)『活動性を高める授業づくり—協同学習のすすめ—』医学書院。

参考資料

資料1(学生への配布資料より)

「英語活動」って…?

☛ 自分の気持ちの向くものから始めよう! ☛

→活動後、必ず、「実体験レポート」を提出しよう!

★「実体験レポート」とは…? ★

- ① (授業以外の)英語活動を行った日付を記す
- ② 行った英語活動の内容を具体的かつ簡潔に記す
- ③ 活動後、「前向き」な一言感想(思ったこと、感じたこと etc.)をレポートする!
- ④ 「紙(ノートではなく)」の状態提出する

【「実体験レポート」の例】

4月15日 ○ちゃんと音読練習！【一言感想】○ちゃん、スゴイ！私も頑張りたい！

4月16日(金) 体調不良・・・明日こそ頑張るぞ！

4月17日(月) ZIPの英語を聞く。【一言感想】少し分かった！頑張りたい！

4月18日(火) △君とTOEICの話。△君は TOEIC 受けるみたい。【一言感想】私も受けてみようかな。

4月19日(水) 高校の文法書の見直し。【一言感想】毎日、復習しよう！

★ 好きな本(医学書・新聞・小説・絵本・マンガでも)を使って…

- ⇒ 好きな部分、気に入っている部分だけでも和訳してみる！
- ⇒ 絵を描くのが好きなら、英語のふきだし入りのマンガ(1コマだけでも)を作ってみるのも！
- ⇒ 好きな部分だけでも、英語で音読してみる！

★ 好きな洋楽・邦楽を使って…

- ⇒ 歌詞カードの日本語だけ見ながら、聞こえた単語を書き出してみる！
- ⇒ 歌詞カードを参考に、好きな部分だけでも自分なりに和訳してみる！
- ⇒ 歌うのが好きなら、好きな英語の歌を熱唱するのも！
- ⇒ 好きな英語の歌詞の朗読でも！
- ⇒ 好きな洋楽を聞くだけでも OK (YouTube お勧め！)！

★ 好きな映画(洋画)や英語のドラマを使って…

- ⇒ シナリオがある場合は、好きな部分だけでも和訳してみる！
- ⇒ シナリオがない場合は聞き取れた英語を書き出してみる！
- ⇒ 好きな洋画を字幕(日 or 英)で鑑賞するだけでも！⇒「glee」・「BS・スカパ・WOWWOW のドラマ」etc.

★ 日常生活の中の英語を使って…

- ⇒ 地下鉄・電車・バスの英語アナウンスを注意して聞いてみる！
- ⇒ TV やラジオのコマーシャルに出てきた英語を聞き取ってみる！
- ⇒ ラジオ DJ の話す英語を聞き取ってみる！
- ⇒ 洋物の食品や飲料の説明文を解読してみる！

★ 「英語」の授業プリント(他の授業のものも可)を使って…

- ⇒ 授業の予習・復習をしてみる(仲間ですると楽しい)！
- ⇒ 授業の音読プリントで表現の覚え合いをしてみる！

★ スマホの無料アプリを使って…

- ⇒ TOEIC の聞き取り問題をやってみる！
- ⇒ クロスワードパズルをしてみる！
- ⇒ 英語のゲームをしてみる！

★ その他

- ➡ TOEIC 等の英語検定に向けて勉強する！
- ➡ TOEIC 等の英語検定を受験してみる！
- ➡ 英語講座(TV・ラジオ)を見たり聞いたりしてみる！
- ➡ 「Zip の5秒間英会話」・「Hello!毎日かあさん」・「おとなの基礎」・「チャロ」・「基礎英語1・2・3」・「ニュースで英会話」 etc.
- ➡ 英会話講座(藤田の英会話講座 etc.)に通ってみる！
- ➡ ネイティブの先生を見かけたら、あいさつ・簡単に自己紹介して、一言・二言、英語で話してみる！
- ➡ 仲間と英語で数分、話してみる！
- ➡ 高校で使っていた教材(教科書・参考書)を見直してみる！⇒ネクステージ etc.
- ➡ 辞書を読んでみる！
- ➡ 「心に響く言葉」などを訳してみる！
- ➡ 英語を教える(バイト・兄弟姉妹・クラスメイトでも OK)！
- ➡ 英語の授業の疑問点を仲間に質問してみる！

★ ミッション(コミュニケーション力向上プロジェクト)を使って…

- ☆ 余り話したことのない人に思い切って声をかけよう！
- ☆ あいさつ・自己紹介から始めよう！
- ☆ 英語に関する話を必ず盛り込もう(ただの雑談ではなく)！
- ☆ 好きな話をしたい場合は All in English で頑張ってみよう！
- ☆ 「ミッション」のことを知らない人(先輩 etc.)には、「ミッション」について説明してくるだけでも OK！
- ➡ 「ミッション」を口実に、近づきたい人と、どんどん接近！
- ➡ コミュニケーション力の向上と共に、友達の輪も広がる！

★★★★ 毎日、「英語活動」を続ける秘訣 ★★★★★

無理しない範囲(長時間ではなく毎日、数分)で
 無理のない時間帯(通学時間や空き時間を利用して)に
 取り組みやすい(気の向く)ものを
 好きな事(趣味など)に結び付けて
 「勉強する」感じではなく、「触れる」感じで
 目的があると頑張れる人は
 目的(TOEIC・英検・留学・字幕なしの映画 etc.)を持って